特別
イ4
3163
59(1)

貴
14
3163
59(1)

御川院百首和哥上月線

春

立春　子日　霞　鶯　若菜

殘雪　梅　柳　早蕨　樓

春雨　雲駒　帰鴈　呼子鳥　苗代

草萌　杜若　藤花　歎冬　三月盡

夏

三

更衣　卯花　蓼久　郭公　菖蒲
早苗　恋射　六月祓　盧橘　蛍
蚊遣火　蓮　氷室　泉　荒和稜

姫川院百首和哥上

春

立春

春たちて梢にさへぬ白雪ハまつさき花の咲とこそ見れ　公實

氷のしたかすのゝさゝ浪くすりまさるせゝの恵　迷房

三宮の谷あや春たちんとの下ゝ岩ゐくゝの里　國信

ゝ野沢ゝ松ゝ雪ハ消ぬ春ハ海ゝ古年ゝまゝ春やゝ見　師教

うちなびさ春ハさてゝ山ハの岩間ハ氷しるやく　頼季

初ゝきゝゝ春風の音ゝさゝ春ゝ花ハ氷　仲實

庭の花ハ川ゝ春ゝ人の春ハ岩間ゝ花ハ春ハ初春　俊教

いはまの八うの名所の一つなるかりまつ　師時
住吉と明ゆく空はすでに春の霞ハてれかとまつ　顕仲
よし野山雪のあけぬとみくまと春はたちぬる　基俊
うらの浦に雪のとけぬるあしたよりなほ春の色　淫源
ちるかの細谷川の解ゆけば水とともに春ハたつ　肥後
春くれば大和の国のあしたのはるかすみ　紀伊
大淀の浦のまつ風のいろかはれとも春の色　河内

子日

袖ひちて二葉の松をかぞへつる君が宿にも千代ぞ経ぬる　公實
春の来ぬるかとせとも思ふ小松ひく野の野べの若菜ハ　迭房

たひとしるしの松をかぞへつる君が千代ぞ初まる　國信
袖ひちにいとく成るかの春の日の松の根　師教
君が代の千の春のしの松ハ今世のあるしのしんと思ふ　顕季
玉ぐしの末ハ千代にあるかのうらの玉ぐさ　仲實
祝ひけるかの松をかぞへつるそ春の歌を　後教
千の春のひとしるしの小松成　師時
七年生の二葉の松ハ引てとしの後の世をこそ　顕仲
野べの出て子ハの松ハ引ぬ二葉の千世の緑ぞ　基俊
賀多ふひくとの松ハ千世の緑ぞ　隆源
約束ふ成松ハ久しき君ハ千世ぞ始ぬ子の日と思ん　肥後

野へ毎年ゝ引うしなう小松原ひき結ぶてかきうゑし紀伊
君が世ゝ千年経の人ゝ祝の日しるしとて松のしるしをとどめ置 河内

雪

雪霜ふる海ゝ海ゝこゝ浦ゝ漕つるゝや海士の苫舟 公實
わきもこゝろ神樹の山を雪さえうゝ霜ふる夜ゝ 定房
折ゝ人ゝて雪ゝ霜ゝ見ゝ立ゝ沢ゝ鶴の山をくゝ霜ゝ 國信
神のゝこゝ霜ゝ祝ゝ雪ゝ霜ゝ降ゝ霜ゝ白ゝ山 師教
みゝ渡ゝ雪ゝ霜ゝ降ゝ霜ゝ白ゝ梅ゝ花ゝ墨 題季
細川ゝ岩ゝ氷ゝ霜ゝ白ゝ梅ゝ花ゝ墨 仲實
浪ゝ立ゝ岸ゝ松ゝ白ゝ雪ゝ霜ゝ降ゝ霜ゝ 俊頼

雪霜ふる渡川ゝ氷ゝ白ゝ雪ゝ霜ゝ降ゝ霜ゝ 師時
若ゝ草ゝ雪ゝ霜ゝ消ゝ白ゝ雪ゝ霜ゝ降ゝ霜ゝ 題仲
海ゝ苔ゝ雪ゝ霜ゝ白ゝ雪ゝ霜ゝ降ゝ霜ゝ 基俊
あつさゝ雪ゝ霜ゝ白ゝ雪ゝ霜ゝ降ゝ霜ゝ 隆源
東海の本芳ゝ雪ゝ霜ゝ降ゝ霜ゝ 肥後
見渡ゝ雪ゝ霜ゝ白ゝ雪ゝ霜ゝ降ゝ霜ゝ 紀伊
川ゝ雪ゝ霜ゝ降ゝ霜ゝ白ゝ雪ゝ霜ゝ降ゝ霜ゝ 河内

嵐

嵐ゝ吹ゝ川ゝ波ゝ立ゝ白ゝ雪ゝ霜ゝ降ゝ霜ゝ 公實
溪ゝ川ゝ嵐ゝ吹ゝ立ゝ白ゝ雪ゝ霜ゝ降ゝ霜ゝ 定房

いかりもこれを見給へ　國信
數ぬるまゝに冬ふかき山里の雪をも花と見るかな　師教
雪ふるにつけてやはゆきさしの山人雪をなるらむ　顯季
冬ごもりし古さと人に雪をとて花と見るまで以　仲實
數ぬるゝ身をとはゞ思へども人なく寂しかりけり　後教
かりそめに雪ふるなかの山ゆゑこゆる雪をなるらむ　師時
梅の葉にさそふ春ひの雪風ふきけるなるらむ　敦仲
雪をこめくるゝ雪ふる雪ふるなかの雪をこそ　基俊
若ちゝ人もあるひぬ雪ふるわれ雪ふるなかの雪ふる　隆源
人めつゝそ手ふれも山里は雪をとうきなる雪ふる　肥後

紅葉のうつるあやめのかゝ山の雪ふる　紀伊
山里に雪の降せぬ雪ふるとをそれ　河内

若菜

雪ふる日のめとあるまゝうゝ雪ふる　公實
あるうてふるかいあるうるおかるゝ雪ふるなかの雪ふる　道房
いけるれるべくもれさるるあの人雪ふる日ふる雪ふる　國信
春の道さけふつゝれは生田ふるの雪ふるなかの雪ふる　師教
雪ふる生田野ふるや志賀の浦ふる雪ふる　敦季
雪ふる日ふる雪ふるの浦ふる雪ふる　仲實
春日野ふる雪ふるの摘海ふる雪ふる　後教

老せずとゆきてあるあのあたりにめてて流れ入る河ぬ雪は野辺
師時

降るあられ雨ふるなりけりしかれども雪はあなたの萩もはぬ
歌仲

雪山の萩のさくらをうきくもて河ゆるみなる小わるる雪れる
基後

雪さえてかるさこぬさ今く綾の女うち垣ひれ小葉を河ぬ目れ
隆源

春立てくすはい七日に雪目の前なれる紙うに雪ぬ
肥後

されば雪とかさへれみうあるうしむかの今かしひうまれ
紀伊

河さもせしけしさ行ううる河ぬ世をたあて野への
河内

殘雪

消のこる初日くれの白雪は年かるこをあるあ成るを
公實

道あゆとてあ地を山里にさ行うはとうを年雪ぬ
延房

雪見はくしもへうくうあるうあ人の雪ぬ雪はあ雪
國信

人河山の木の下陰より村さゆり雪を冬はくさなりかの
師教

山里は垣ひに殘り白雪は年をあるに消やを河ぬ
歌季

雪さていれもこそしと河里の松のうち梁に漢雪
仲實

あらくの雪はうしは雪うしをうを山の雪は村消
後教

彩雪は雪立ぬ世にあるくれはあ神雪はうう社れ
師時

むをくくうう大うあのう神は雪はうう社れ
歌仲

雪は目のう雪にてれ垣ひあ友ま河雪は消ぬ
基後

村消し雪もあはは尺くなくに雪の雪は秋うう後
隆源

あら風のまくうらけく吹雪やあ深山の里
肥後

春さてハ日数へぬ重と思ふこれ殘る雪ハ流るゝ水　紀伊
雪あらてなを屋さへ雪の花咲重　いまさへ人の出と思ふ雪　河内

梅

梅うえを神なつかしくうゑ置てうゑぬ宮殿　公實
匂ひをてわるくうまむ梅のうゑ枝を雪の曇月　定房
ひらけるかさ〇の梅をたゝ今てゑてうゑ置雪の山里　國信
今ハ梅さく〳〵宿ハ心せむ梅むまきあるよき酒を酌も　師教
梅の花吹ちきてくゝ雪ハ多ゆゑ神とたゝ風　歌子
梅の八重ちく梅ハ梅り雪ハ雪風のうゑ枝とゝ雪　仲實
梅の花色ゝ戸ゝ入ゝを香ハ梅ゝ香ハ梅ゝ香　後教

梅の花匂ふ雪ハ今わゝ紅ハ雪ハ雪ハ雪　師時
雪ハの月ハ梅の花色香ハ雪ハ雪　仲
紅ハ雪ハ雪ハ雪ハ梅の梅ハ梅ハ梅　基俊
梅の枝をわ月ハ神の匂ハ雪ハ梅ハ　澄源
なハ梅ハ吹ハ風ハ梅ハ雪ハ梅の匂ハ雪　肥後
梅ハ雪の匂ハ梅の匂ハ梅ハ梅ハ梅ハ　紀伊
梅雪の匂ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ　河内

柳

柳ハ枝吹ハ風ハ雪ハ雪ハ雪ハ柳ハ　公實
雪ハ柳のうゑ風ハ雪ハ雪ハ雪ハ柳ハ　定房

春風にまかせて柳はかずしらぬ　國信
さらぬのさとはなれまかりむまちて風は浪にまかせて柳のなを　師郷
伝説の柳のいと城楽にけて　弘季
わさみなりと云はれ深にいたる水にまかせて柳のうらとてうら　仲実
藻にうもれかくれたるあるはなを見せてはなれそひ柳風はなみにまかせ　後教
はなれ出たる緑はなれひしやあらはんまつ柳の条　師時
緑なひく河そひ柳春にはなれみるとはなれ春は流にまかせ　弘仲
春風に浪にまかせいとくちゆるれはなれそひ柳水にひたれて　基俊
河そひの柳は条はうらへて浪にまかせ　隆源
青柳の条はなれるしのうちなれるはなれ吹る風のうちにまかせ　肥後

風吹は枝にまかせ春柳の条はうちなれ　紀伊
春柳のうちはなれるいとはなれ春風にまかせ　河内

早蕨

春日野の紫はなれるはつ蕨はわらはの蕨　公實
郁山のはなれ明るはつ蕨のあるひもとけてはつ蕨　迦房
春風にまかせはつ蕨はなれ　國信
武蔵野はなれはつ蕨はなれ春風にまかせはつ蕨　師教
紫はなれ春にはつ蕨はなれ春風にまかせはつ蕨　弘季
はつ蕨はつ蕨はつ蕨はつ蕨はつ蕨はつ蕨　仲実
春はなれと打人もなれはつ蕨　後教

夜明月と称する人出れば蕨は雲の焼のこるらん　師時
雲ふまでは宮のやめうらん先も人出るなり下蕨　為仲
見山本の法のこるされば下くるひい河辺ともちるけり　基後
野へ入れば海さかりのうらにはお蕨れれるうるたれ出れば　隆源
野火野の焼出るうさ蕨を焼と出てやの人のうれ　肥後
海さかりのうふ来よりうるこ海くとと岩出る野人の蕨　紀伊
むさう野にとは知ひしか紫の蕨は芽ゆるの見れば　河内

梅

宿かりてたちのあさけた梅む散をいられれおるやうら　公実
山梅かるよ知れるうらいたうる花毎よるうるやわるむ　庭房

花さうう峯に雲の自ら出るなるやちまるれん　國信
本の下の黄の緑をうえまて人を散るるや梅るか　師教
梅む白ふる月まて知て思の風の紅うしるるさに　為季
花れちる本の下風はむめのつうる染ぬ梅の衣裏うう　仲実
梅む咲めう時をみうれ山のうひるとれて春へうれ　後教
春風ふ高れ夜明ぬうひてぬいさへ人宴梅るか　師時
うう紅の樹葉の星はさへるすに尾上の梅香と紅れ　為仲
春紅梅てたちうるや奥山の風を梅れ紅出く　基後
春毎よ梅の梅のむちるまとたるむ紅年は時　隆源
山梅白ふ盛は白ふれやうるめうとうるやうるむ　肥後

あるひなくらゐゆかは春は明けぬのかはの花ちりかか　紀伊
金沢のそはまに春はわるあしの山梅花のはるもあるらん　河内

春夏

形へ毎に深き海さう波のよりかゝれる　公實
雲井山よりのめる春夏ぬわめは春のうらゝとそなる花の嵐　道房
ぬわるかはるかくふかやあるんうゑめるなきさの春風　國信
春夏は形へのゑをそれむ春やあらはるゝ明るとは海のあるむ　師教
春をくるのは春夏ぬしるしたむは波はるゝ花ひとゝ　教季
冬ゝ春と見てしゝ春形へ梅花は生の春よ深きゝ　仲實
見てくると思へいかのうゑ形へぬ方をきゝ春夏よりや　俊教

春は波は多やうゑ形へのゑをかゝるゝ　師時
春夏は春はゝ波はるゝ波はは形へ春夏は波は行なへて波多か　教伸
春夏の深初しるわ片思はうの春のあさ春は　基俊
ゑる夏は遠をゝ春夏をゝ形へのゑを深のかは　隆源
深きくゝなるあくゝるゝ春夏は春の夏は形の思れ　肥後
ぬわるひる春夏るゝ春は夏は形の思れ　紀伊
形は春夏は春は夏は波は春ひるゝ　河内
くゝ世のゝるなれ思ひゝ

雲豹

深のくゝる苦の多深をゝ豹のあくゝみゝ雅俊の人　公實
春は海のゝ春は形へは海のゝけもゝ　道房

我わしし春の野よ調し春駒の手中もうち羽さしあれ　諸のうち
國信

春駒野べに鳴のきのくしるのは浅き色は篝中や松原すましん
師頼

さらに聞く人やたましん春駒野べにいつゆの鳴の野かり飛ぶ外
敬季

小笠原まで鳴よもる下萌は下もおのつから春の外
仲実

それ聞るは武田様のこゑれ鳴にし春こそおれ駒
後頼

あはさらら春駒は今のこゑまま鳴やそそれのこまするこ外
師時

小笠原に言へるは牧のえるまま鳴はくくしさも春駒おれ
敬仲

春来ぬともいつそ去りの今さ草かくくるの牧は牧はおれくく春駒
基俊

むつ一つ捨な鳴も鳴いくるの木の萩の綾
澄源

我せしるかかれの鳴も野よあれて春駒の野のかは外
肥後

こ川の月は雲焉も今は生めまてくもあれの鳴を放て　くくく
紀伊

冬枯よ今日鳴も春駒は野は木の外
河内

帰雁

雁は一は雲むかしく今日よりや八重雲にかくれはくの鳴
公實

越路には昨夜こそ川ても雲を雲井かへし雁は鳴む
匡房

春毎よこえの雲路ふ出てわかきれせぬ今雁
國信

都出る我たるを弁しなるは雁をのむなるを見捨て何くくむ
師頼

今くはとは雁の物を数ぬ余花を見捨て帰るか雁ぞ
敬季

いかなれは苗代枕よ鈴くかりの宿は中もと帰るか霞て
仲実

春くれは雁のものを見もとばかりて帰る雲路よ出行も
後頼

鶯の鳴もたえぬ春の日の霞ゆるまぬこのかた　師時
春の山の雲にうつる雪ゆゑに花や咲らむ　弘仲
世の中の人の心の飽ぬるかなかりそめにのみ　基俊
浪あらて雲のなかれぬなるやまの端ゆ月の居て　隆源
水鳥の文て雲の中なるかゆゑの宮ゆ月の居て　肥後
数知ぬ雲のやまひき年経ぬる雲にも松の居て　紀伊
うゆる所なりかゆ雲れ花の別に吸ゆる　河内

愛子者

さもいかゝ思ひて鶯の鳴ぬ時ゆ思ひ　公實
思ふまゝ子をやもたるさ時ゆ鶯の森のうゝ鳴　廷房

立鶯の道をたづねこゝ有ゆ雲なる人なりけりあて　國信
消まくの雲の夕暮なるあるゆ松の時ゆ　師教
さ紅葉の乃なる山の時ゆ鶯ゆ多きゆ　弘季
あ人を所人の紅山の時ゆ鶯の獨鳴ゆ雲ゆ　仲實
東路乃なるゆ月の夜のゆ山ゆ鶯ゆ何ゆ人ゆ　俊恵
人の見せぬ松の山ゆ時ゆ鶯ゆ何ゆ人ゆ　師時
鳴ゆ山ゆ多ゆ雲ゆ山の時ゆ　弘仲
花の月ゆ誰時ゆ多ゆ　基俊
あ人の山ゆ時ゆ鶯ゆ人ゆ紅葉　隆源
東の人を行ゆ山の時ゆ鶯ゆ雲ゆ　肥後

ゆくさきぬかたもゆかしき山への呼子鳥ぬなく[illegible] 紀伊

鳴ともそれも誰かはゆくらんこゝろやはしらぬ呼子鳥 [illegible] 河内

苗代

苗代にせきくる水のたえせぬはしかすかにいはぬ[illegible] 公実

苗代の山田のかけにしみつゝもゆくらんや[illegible] 匡房

種のうゑし苗代はしをあさゆく今はの[illegible]をぬる 国信

小山田のかけの苗代水に苗代のこゝろしるかれ 師頼

ゆふくれに種をまきて苗代のつれなきをしのぶかは 顕季

ふたりをせく水にはいそきて苗代水山田に種まきそ 仲実

秋のかりしりの苗代はまでたる[illegible] 俊頼

[illegible]はあれかはしろの苗代にさへ[illegible]まさりて 師時

しめひてし山かけの苗代にさまよへるかれ[illegible] 顕仲

わきもこが門田にうちなやしきて苗代のをさみて[illegible] 基俊

たのひきの堰のあかれるかりにしてあらたにいかなる[illegible] 隆源

たみなはしほる苗代にしめなくかへり[illegible] 肥後

種苗代も[illegible]わかれにして[illegible] 紀伊

あれなるにしめさへそふるめぐみ山田に苗代をたのむる 河内

菫菜

菅原のふるき[illegible]にあれはなうら[illegible]のすみれさく[illegible] 公実

たゝみの山こえしゆくへのはなるに[illegible]すみれ[illegible] 匡房

あしひきの山鳥の尾のしだり尾の長々し夜を一人かもねん　国信

淺茅生の小野の篠原しのぶとも人しる恋はまけじとぞ思ふ　師教

紅なる岩間のなでしこ咲きにけり見るかひ有りて人の来ぬ日は　敦家

西の方有明の月の出でぬれば我ぞ先だつ人待ちがほに　後教

わすらるる身をば思はず誓てし人の命の惜しくもあるかな　俊賢

君ゆゑ思ひ乱れて黒髪の乱れてけさは物をこそ思へ　師時

あさぢふの小野の篠原しのぶとも人しるしるしなくぞ恋しき　俊仲

恋すてふ我が名はまだき立ちぬべし人しれずこそ思ひそめしか　基俊

あしたづの鳴く音聞くたびに我が恋の思ひ乱れて寝ぬ夜ぞ多き　隆源

故郷の浅茅が原に出でしかど月の光ぞ宿りなりける　肥後

草葉に露置きそめてよりさしてこそ物思ふ秋の夕べ　紀伊

ちぢにもなるべしの思ひつかぬ草むらにもの思ふ虫の声　河内

杜若

花の色の濃きにつけても杜若あれにあさして鳴くまがほ　五条天

風吹かば消ぬべきかの杜若のうきねにたつの波の立ちかへ　医房

花かつみ名にしおはばかりそめの恋にうきねの波の立ちかへ　盛信

かつみ刈る沼の水の浅きにあらぬ恋にうきねの波の立ちかへ　師教

東路の小野の篠原しのぶとも人しるしるしなくぞ恋しき　敦基

鳴る音の聞こえぬ月の池水に杜若の花の影ぞ浮かぶ　仲実

月の出の山の端の杜若花の色の濃きにつけても　後教

[illegible]
住吉の松のあるかぎりは　師時
住吉の松のあるかぎりは　孫仲
[illegible]　基俊
[illegible]　隆源
[illegible]　肥後
[illegible]　紀伊
[illegible]　河内

藤花

なにはづにいとうたのかぜはくわのかぜ　公實
河よりをかぜにまかせて白ふぢのたゆまずかをるいとゆふ　匡房

[illegible]
松浦の緑の糸のあしたよりかぜにまかせて　國信
住吉の松にかかれる藤のはなはなみるかぎりなし　師教
[illegible]　孫季
[illegible]　仲實
[illegible]　後教
[illegible]　師時
[illegible]　孫仲
[illegible]　基俊
[illegible]　隆源
[illegible]　肥後

雪ぬ花咲春の白浪あらそふもいろ沖の波　紀伊
ひさしきはいく志賀の海ゆ花なれハ逢ふうん迎春風　河内

歌冬

我宿に初の雪ぬ来てもみよ梅の花咲山吹の花　公實
春雨のうつ斜の河の新ふついくへうえん山ふきの花　延房
黒ひ沈清瀧川のそやくれて浪打ひ春ぬ数冬　國信
蛙なく三門の中河のあさ霧ふ庭ふ物ふ春の山吹　師教
山吹の色さく宮殿春毎ふ初ふ咲ふ物ふ　敦基
蛙なく海の迎春風ふ清ふ春ふ月ふ春の山吹八重咲ふ　仲実
月吹風浪ふ物ふ咲ふ物ふ春ふ山吹ぬ　後教

玉の井ふ清ふ咲ふ春ふ山吹の花ふ宿ぬ感冬ふ　師時
移ふ春の山吹ふ春ふ春ふ春の白ひ山ふ物ふ　敦仲
山吹ぬ花咲ふ春ふ河清ふ井ふ春ふ今ふ河ふ　基俊
咲ぬ春ふ人ふ春ふ山吹の小路ふ春ふ物ふ後端　隆源
移ふ白ひ山ふ春ふ井移の後の山吹の花　肥後
数冬の色ふ春ふ今ふ昔ふ物ふ井ふ春ふ　紀伊
ふ物ふ春ふ咲ふ物ふ山ふ春ふ色ふ春ふ白ひ山ふ　河内

三月　畫

山吹ふ春ふ春ふ春ふ春ふ春ふ春ふ春ふ春ふ　公實
法ひ春ふ春ふ山の春ふ春ふ春ふ今ふ春ふ春ふ　延房

[illegible]や日数ゆくすえをかへて素性と言ふ歌より
さもこそ人は素性なれ名は一枝の花ぞ咲かめ行末
花の数半ばなりぬと知りて交ぜざりけり素性
[illegible]のさもと言ふてもくちをかへ[illegible]
我宿をいくとせ[illegible]この[illegible]今日は素性
橘花山路[illegible]より[illegible]
あやなくたなびく[illegible]素性
素性[illegible]
花も[illegible]
[illegible]

国代
師教
[illegible]
伴実
俊教
師時
[illegible]伴
基俊
[illegible]源
肥後

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

紀伊
河内

裏

東衣

[illegible]
交衣花の[illegible]
捨てぬ[illegible]素性
交衣[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

公實
延房
國代
師教
[illegible]仲
仲実

夜むらさきなるものの色にはあらねど時々さらの袴
ぬさうつる花の衣にはかなしきものを思ふとは　後鳥羽
あくれば花の袖をぬさうつる夏は衣をうつるなりけり　師時
しら雪のうつる袖の羽衣さくられば袖よりぬるる　顕仲
春霞たなびく花の袖ぬるるかはの衣をうつるなりけり　基俊
あさぢはらかよひ路にうつる衣んの袖にふるとしらるか　隆源
春ごとに花の衣にうつるとてとりぬるさへ袖ぬるるかな　肥後
うつしぬる袖にぬるるめくらの夜衣さらにわかやんを　紀伊
卯花　河内
神垣にかくれなきとぬまの白浪は卯花さらにかけり　公賢

夜衣の袖の垣ほに卯花いろこそ布袋さらしなりけれ　定房
卯花や咸陽宮の白雪のわかるるかとぞ思ひける　国信
卯花の垣根にかかる白雲はゆきかとぞ見まがひける　師教
卯花のかくれなきかとぞ布袋さらしなりけれ　弘基
卯花のかくれなきかとぞ月夜にぬれぬる　仲実
卯花の袖にかかるかとぞ見まがひける　後鳥羽
和歌の浦の卯花垣にかかるかとぞ　師時
卯花の垣ほにかかるかとぞ　顕仲
閑なれば月の光にうつるかとぞ小野の里の卯花　基俊
雨降れば卯花さらにかかるかとぞ　隆源

[illegible] 肥後

[illegible] 紀伊

[illegible] 河内

葵

[illegible] 左實

[illegible] 廷房

[illegible] 國代

[illegible] 師教

[illegible] 教季

[illegible] 仲英

[illegible] 後教

[illegible] 師時

[illegible] 教季

[illegible] 基俊

[illegible] 隆源

[illegible] 肥後

[illegible] 紀伊

[illegible] 河内

郭公

[illegible] 公實

[illegible]　遠房
[illegible]　國信
[illegible]　師孔
[illegible]　孔季
[illegible]　仲文
[illegible]　俊孔
[illegible]　師時
[illegible]　孔仲
[illegible]　基俊
[illegible]　隆源

[illegible]　肥後
[illegible]　紀伊
[illegible]　河内

菖蒲

あやめ草よとおもふ心ばせ　公實
[illegible]　遠房
[illegible]　國信
[illegible]　師孔
[illegible]　孔季
[illegible]　仲文

我宮ハ軒のつまの　さきをれハ　ちりかかるめしこぬなりけり　後執
さくぬゑの　まつ花ゝ　成宮に　ゆくとハ　わやめ成　ゆきをれ　師時
ゆくれとも　枝よりこぼ　わやめ　まよはれけるわとや　今ゝ　孔仲
ゆくゝ　君ゝ　涙　形ゝ　わやめ　まゝ　ゝ　ゆきわのなれる　基俊
ゆゑ　毎ゝ　ゆきゝ　絶せぬ　あハさけ　わやめ　ゝ　孔　孫ゝ　逢源
遊　生　世　の　書　孔　わやめ　まゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　肥後
わやめ　まゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　紀伊
意　宋　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　わやめ　まゝ　ゝ　ゝ　ゝ　河内

早苗

いなをとれとハ　ハ　苗　もたひ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　公実

ゝ　苗　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　匡房
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　國信
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　師執
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　孔仲
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　仲実
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　後執
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　師時
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　孔仲
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　基俊
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　逢源

田子氏とうの事をこれに世ひさわ[illegible]ものの　肥後
おれしと山田のさうへ元田子氏　紀伊
五番さう田子氏すそいわるひめれさぬこのこと　河内

照射

五月山峯に毎月鹿しんせよ照射のせるふこれ　公賢
さりそう文城う原の下雲よ西よりもとうく花そ　廷尉
雲ふ鹿ものさ毎月の関氏本の下ハこうりもうこそ　四信
照射もうさ月さうすまハ中もこ城の考表山へ前　師時
毎月やこさ山の峯ふこうひ夫ハ毎氏路まの早こうう　別仲
わひの山ものこ原よこりすくなくふ氏とそけわう　仲実

照射さう峯山の原よ鹿のめもこ世ひ城ひてうの　後松
名城れこ方のくふうひもなく小倉の山ものこう　師時
さ月やこみひのこうりけこひ尾よや方の鹿ん　別仲
五月山こうり枝ハ我ものこう同もわうこ小ひ　基後
照射ふ鹿ものこもわこの物ひ毎ものこ木こ枝の不ふ　隆源
さ月やこ雲こうり氏皇ものこ河ハこうり入四照射　肥後
こ不ものこ城山のこそよ方鹿こ行ものこ世ひ　紀伊
こ城ものこ方の下雲よひうり氏照射ものこ鹿もわ　河内

毎月

後の方の雲の雲や行ひんこ月毎氏ものこ　公賢

はさもあり水鳥の篠やの水の水にいてはとん水の和　　匡房
こをあらん波さへ水にもうつる水の水のあまりもうつる水のさま　　國信
水の水にはれの色の紅葉こそ　　師教
久堅の雨まもなく水の水にいくあふ波の新の新　　敦基
雨ふりぬりもすさまじ水の水の池の水の蓮　　仲実
岩ぬれの水の水にうつる人の影の水のうつり　　後教
いかりて雨の水にうつる水の水の波の波　　師時
水の水にはれもなく波の水の水の波の波の水の　　敦仲
いかに安徳の宮の水の軒の水の落の水の水　　基俊
五月雨の水の水の水の水の水の水の水の水の水　　隆源

藻塩草の水の水の水の水の水の水の水の水の水　　肥後
五月雨の水の水の水の水の水の水の水の水の水　　紀伊
さつきの水の水の水の水の水の水の水の水の水　　河内

花橘

常盤の花の花の旬の旬の一本の橘の花の花の　　公實
五月雨の水の水の水の水の水の水の水の水の水　　匡房
なかさつきの橘の花の花の花の花の花の花の花　　國信
五月雨の水の水の水の水の水の水の水の水の水　　師教
我宿の橘の花の花の花の花の花の花の花の花の　　敦基
五月雨の水の水の水の水の水の水の水の水の水　　仲実

橘の本にはなをよろこぶるあるのうちにあるを
吹ゝ世のなかのきさらぎこれはこれ橘の白ゝるゝ　後鳥羽時
我園の花橘の名をられハ金の玉のなれる成ケり　孔雀
黄ばみ八の飛ばんとしたれ朝ハもゝ橘よ神そ志ゝるゝ　基俊
朝ちるか橘のうゝ白ゝ雪ふるゝまゝ神も人ゝ　逢原
散ぬ花橘ハ雪ふるゝ人ゝ思ふ　肥後
さ月ゝ　こゝ橘のうゝにあやるゝ人の袖れ替れ　紀伊
なれ花橘の匂ひ那ゝ　ちひろふ袖ハ雪とれ　河内

蛍

雨降江の芦の葉ゝ　蛍ハ芦ゝ毎のゝ　公賢

五月雨芦の葉ゝ蛍ゝ　思ふ物ゝ　廷房
夢ゝ宿ゝ　蛍ゝ　國信
夏ゝ　蛍ゝ　師教
大井川　蛍ゝ　孔雀
ゝ　蛍ゝ　仲実
ゝ　蛍ゝ　後鳥
ゝ　蛍ゝ　師時
ゝ　蛍ゝ　孔仲
ゝ　蛍ゝ　基俊
ゝ　蛍ゝ　逢原

紙とこゝゆう雲のひろがるもしへ吹風はしへの花をうれとゝ見えさらぬハ雲成ける
江こゝろよへとも消ぬ雲うかゝ行うるゝ思ひかな　肥後
　　河内　紀伊

數遠火

數き火の下にくゆる思ひハ人しれぬ思ひ成けり　公實
すなをうゝ宿にいとう數き火はあらはれぬる事ハ　延房
袖の上に社下にくゆる數き火はゆくへ人成けるとゝ　國信
數き火の煙うこ紀文の袖ハ綾の伊やう綾の成ハ世　師教
わさもこゝにいそをうせんゝやう火のうもえすうゝ紀和と　弘雅
山賤の宿ゝ消えせんくゝひろ火はゆえてもゆるけれ　仲實

世中をわくゝ袖にくゆうゝやう火の思ひしをひてゆう煙　後教
雲ゝ海とゝ成ら代雲のゝやう火ハ雲ゝ海とゝ成ら代雲の　師時
思ひの袖ハうゝ思ひの煙ゝ行くゝひの煙ゝ紀文成文言　肥仲
さゝめ成ゝ文ハ成やう行うゝきに數き火の煙の世紀れ　基後
ハゝ雲ゝ成ゝ成ゝとゝ成ハ紀文ゝ數き火ハ綾のやうき　逢源
數き火をゝ海ゝ成ゝ成ゝ成ハ紀文ゝ數き火ハ何　肥後
綾の男ハ外面ゝ成ゝ成ゝ成ゝ火の下こゝ成ゝ世成ゝ成ん　紀伊
ハ成ハの外面ゝ成ゝ成ゝ成ゝ火の下こゝゆりて世成ハ成　河内

蓮

池のうゝ人蓮のゝ人ゝ社人ゝ成ゝ成ゝ成ハ成ハ成れ　五實

あひ海もけうれぬ花そ新勅撰のうちに　定房
みはてぬ蓮のうちの浮葉の志ほ風ぬ波の山ふくを花へのあ　國信
しなうの姿の池の蓮ゆかしけ花咲ぬるうら　師教
ほしめてはもしりそ詠しる蓮葉成つるの秋ふ月常とこへハ　教仲
文ふ池の蓮の露をうらうらしかそとに染るうら　仲文
夏ぬれかくすの蓮葉ふ秋ぬ入ぬ蓮ぬ我袖の露ふ　後教
そやこそ山ぬ出こそ世ふ浮ぬ蓮の蓮の上ぬ　師時
蓮葉ぬ秋ぬ入ぬの花なれ風こそ吹ぬ　教仲
浮世ふ出こそ世ふ浮ぬ蓮葉ふ秋ぬ入ぬ　基後
二ふ出こ世ふ浮ぬ蓮葉ふ秋ぬ入ぬ　隆源

ゆふ月ふ出ぬ蓮ふ池の水やそ出ぬ　教後
ふ出こ世ふ浮ぬ蓮の花ふ秋ぬ入ぬ　紀俊
ゆふ月ふ出ぬ蓮葉の志ほ風ぬ波の山ふ　河内

水室

蓮植てゆ氷室ふ水ふ出ぬ　五宮
みなの月も涼ふ入ぬ山陰の氷室ふ　定房
君ふ逢ん代ふ成ぬ水室ハ氷ふ入ぬ　國信
立ふ入ぬ衣の袖のすゝ涼ふ秋ハ水室ふ　師教
夜ふ月も涼ふ入ぬ松陰ふ氷室ふ　教季
月ふの暮ふ入ぬ水室ふ涼ふ　仲資

[illegible]

[illegible] 後頼
[illegible] 師時
[illegible] 教仲
[illegible] 基後
[illegible] 隆源
[illegible] 肥後
[illegible] 紀後
[illegible] 河内

泉

[illegible]

[illegible]

[illegible] 師教
[illegible] 教季
[illegible] 仲実
[illegible] 後教
[illegible] 師時
[illegible] 教仲
[illegible] 基後
[illegible] 隆源

立よれハ涼しかりけり夏衣やどの庭のまさきかづらかな　肥後

譲もはてぬいつミ河成ともに夏を忘るゝ宿のかげかな　紀伊

今もなおぬるむまに生ひる泉の影しげなるゝハ岩がねなりけり　河内

荒和祓

河の瀬にをりたつ此祓きるさやひへの神もうけひくらん　公実

杉の河のたせのよりは御禊して千年の命のへてゆかん　匡房

夜祓へわかさ川社の祓すけハ秋もちかさとまうさぬかな川へよ　国信

わきもこがみそきそれにもかさするぬさくらる夏祓か　師頼

六月の川せにひ祓らるひさなる此祓せぬ人ぞあさき　顕季

八百万神もなくさめんふきすさぶぬさの御祓ぞけふはせし川　仲実

沢へわかわさ跡ならはちとせの家のたかきかなかけるかな　俊頼

わきかえる河の瀬なみなつけて六月ころの御禊してもとろう　師時

みそきへやさしくなりける神もよろこひ此御祓するなるを　顕仲

六月のきよき川原にみそきしてちとせなる神かけし　基俊

千年まても人なるらめや六月の三度するぬさの御祓よ　隆源

夏ころの夕になれハ河よりもわさ人のちとせをせん人ぞうき　肥後

山の井の水もまぬさくるゝ夏ころ河の瀬毎に御祓しつるかも　紀伊

沢みのようきことへみな月のかきりき此瀬にハ流すらん　河内

堀川院百首和歌巻上終